

「残存」からの脱却

—アメリカ民俗学の試み—

小長谷英代*

KONAGAYA Hideyo

Departing from "Survivals"

A Challenge of American Folklore Studies

The study of folklore arose from the urgent need to preserve the fast-vanishing remains of folklore in emergent modern societies in the late 18th and early 19th centuries. Once folklore was thus conceptualized as anchoring in the distant past, a principle problem of its researchers was how to resituate the significance and relevance of folklore and its studies within the present-day social and intellectual contexts. Japanese folklorists have kept away from fully engaging in the reexamination of such a conceptual dilemma of folklore. It is long overdue that they take issue and deal with how they could overcome the earlier disciplinary paradigms, and reformulate folklore into a contemporary subject. Calling attention to the need for a discussion within a larger transnational network of folkloristics, this article takes a look at the way their American colleagues have challenged the temporal difficulty of folklore, particularly with regard to the notion of "survivals," which has persistently clung to the term "folklore" in popular English usages. Among various reflexive efforts of postmodern perspectives in American folklore studies, this article places a focus on the critical historiographies of folklore studies, through which American folklorists have argued and sought after a future direction for and possibilities of the discipline.

キーワード：フォークロア 残存理論 進化論 民俗学 アメリカ

近年の大学を揺るがす学部や領域の大規模な再編、或いは解体といった大きな変化の中で、世界各地の民俗学は周縁化され、窮地に追い込まれている。大学がグローバル資本主義の市場原理を前に、生き残りの競争に支配される今日、民俗学はその存在意義や目的をあらためて問い直す必要がある。民俗学はもはや「現代」に背を向けてはいられない。民俗学が現代と向き合うということは何を意味するのか、現代における民俗学の可能性はどこにあるのか、本論では、今日の

* 長崎県立大学国際情報学部

民俗学をとりまく問題をアメリカ民俗学の試みに考察し、その問題への取り組みを通して、今後の民俗学の課題を考えていきたい。

アメリカ民俗学は、今日大学に広がる学部再編の動きに強い危機感を持つ。人文社会科学領域における民俗学の位置や社会との関係等の様々な議論がある一方、アメリカ民俗学のより根本的な問題は、「フォークロア」という言葉である。英語の一般社会の用法では、「フォークロア」は、誤謬、虚偽、喪失といった否定的ニュアンスを含み、また学問領域の名称としても同様のイメージを連想される。その根底には民俗学が近代ヨーロッパで「フォークロア」を過去からの「残存 (survivals)」として概念化してきた歴史がある。アメリカの民俗学者は、民俗学に対するこの不名誉な「誤解」を払拭すべく、これまで理論、方法論の発展の中で「フォークロア」を「言語芸術 (verbal art)」[Bascom 1955]、「小集団によるアーティスティックなコミュニケーション」[Ben-Amos 1972] といった様々な概念で再定義し、過去の「残存」から抜け出し、現代の表現文化 (expressive culture) の学問へと転換を図ってきた。しかし、たとえ今日の民俗学者がフォークロアを新たな概念に置き換えようと、フォークロアという言葉の歴史には、過去の意味が刻印され、繰り返し蘇るのである。

本論ではアメリカ民俗学におけるこの「残存」概念の問題とそれに対する民俗学者の挑戦や葛藤を具体的にとらえながら、民俗学の問題と可能性を考えていく。領域の停滞や閉塞状態の中で、民俗学はどこへ向かうのか、何を指すべきなのか、アメリカの研究者はフォークロアに対するマイナスイメージをどう克服しようとするのか。これまでのアメリカ民俗学者による多くの試みの中で、ここでは2つの民俗学の学問史 (historiographies) へのアプローチに注目していきたい。一つは、アメリカ民俗学が過去の呪縛から脱却すべく、学問的前提を問い直す試みの一例として、1960年代末のアラン・ダンデスによる問題提起とその意義を見ていく。もう一つは、領域における1990年代以降の批判的歴史研究への視座の転換を示したうえで、19世紀末のアメリカ民俗学の形成期にフォークロア概念を検証しながら、民俗学が「過去」にどう取り組むべきかを探っていく。

「現代」への変革

アラン・ダンデスは日本で最もよく知られるアメリカ人民俗学者の一人であろう。1960年代以降、構造主義への転換や心理学的アプローチの導入等、アメリカの民俗学を常に新しい動向やラディカルな展開へと牽引してきた研究者である。ダンデスはフォークロア理論、方法論の論考において語られる場合が多いが、1967年アメリカフォークロア学会での発表論文「フォークロア理論における退化論的前提」は、当時のアメリカ民俗学の現状、また同僚の民俗学者達の姿勢や考え方に対するダンデスの焦燥感と改革への意図を示すもので興味深い⁽¹⁾。同論文はダンデスが「退化 (devolution)」を問題化することによって、領域の停滞の打開を目指し、おそらく特に保守派の民俗学者に対して、問題提起したものである。ダンデスがこれをなぜ、どのようなアプローチで問題化し、それが民俗学の動向の中で何を意味したかを考えてみたい。

ダンデスは、アメリカ民俗学には内在的に「進歩 (progress)」に対する否定的反応、「過去」志向があると述べる。フォークロアの過去や原初性に完全を求める民俗学者の「世界観 (Weltanschauung)」が、変化についての研究、及び変化そのものに対する否定的姿勢に繋がって

いるとし、その再考を迫る [Dundes 1969: 5]。アメリカは近代国家としての始まりを旧世界との決別に印す。新世界は「過去」「伝統」を象徴する旧世界と対比し、「現在/未来」「変化」をビジョンに描かれ、「進歩」への強い信奉の下、科学技術の発展、開発等、が推進されてきた。ダンデスの主張は、現代アメリカにおいて、民俗学が「近代」「進歩」のアンチテーゼを成し、固守する役割を果たしてきたことを示し、民俗学者の再考を唱える。ダンデスがこれを発表した1960年代末、後述するようにアメリカ民俗学ではコミュニケーションやパフォーマンスの研究を中心に、大きな変革が起こりつつあり、現代性へと躍進していたはずである。それにもかかわらず、ほとんど「進歩」が見られないとするダンデスの見解は、フォークロアに刻印された「過去」が、アメリカにおいても容易に克服できない問題であることを示す。

ダンデスは、「進歩」に抵抗する研究者の世界観をもたらす根本的原因として、フォークロア領域の底流に流れる「退化論」の思考を指摘し、過去の民俗学の諸理論にその痕跡を遡及的に辿る。ダンデスは「退化論」の主要な例として、ハンス・ナウマンの「沈下文化財説 (*Gesunkenes Kulturgut*)」、マックス・ミュラーの「言語疾病説 (*disease of language*)」をとり挙げている。ナウマンの沈下文化財説は文化の二層理論を基に、社会の上層階級から下層階級のフォークへの文化の沈下を論じ [松尾 1976: 10-14]、ミュラーの言語疾病説は、神話の不合理、野蛮な要素を、時間の経過に伴う忘却や混乱による本来の言葉の「退化」と説く⁽²⁾。ダンデスは、こうした思考によって、フォークロアは文明や社会の進歩の中で、本来の意味や機能を消失、誤解、劣化したものとして意味づけられてきたと言う。

1960年代末、改革気運のアメリカ民俗学者にとって、これらヨーロッパの過去の研究理論が、自分たちの研究に直接関係するというさほど強い自覚はなかったであろう⁽³⁾。しかしダンデスの論文はアメリカの民俗学には退化論的思考が根深く継承され、研究理論や方法論に多大な影響を及ぼしていること、またそれにもかかわらず、研究者達にその十分な自覚がないことを指摘している [Dundes 1969: 10]。ダンデスは、ナウマン、ミュラーを始め、グリム兄弟、タイラー等、民俗学、人類学の始祖のフォークロア概念、及びトンプソンから、ドーソン等に至るまで、アメリカ民俗学を主導してきた先学の研究に、フォークロアの退化論的思考を抽出していく。例えば、トンプソンの歴史地理的手法による民話の国際比較研究は、20世紀前半アメリカ民俗学で主流を成した領域の規範的枠組みであるが、ダンデスは民話の原型の再構築を究極的目標に掲げる研究は、結局、過去や起源に完全性を想定する退化論に基づくと捉える [Dundes 1969: 6]。

ダンデスのこの問題提起に対しては、6年後になって1975年にエリオット・オーリング、1976年にウィリアム・A・ウィルソンらによる反応がある。オーリングは、ダンデスの問いかけに対する研究者の無反応を嘆く一方、退化論概念の矛盾や、概念基準の多元性を示し、ダンデスの理解は定義上の錯覚であると反駁している [Oring 1975]。逆に、ウィルソンはダンデス以上に、民俗学における退化論の影響の強さを示す。しかし歴史地理手法を退化論と解したダンデスへの批判として、フィンランドの歴史地理手法はもともとジュリアス・クローンの進化論的想定に基づき、これをカール・クローンが理論化していく過程で退化論へと移行したものである、よって歴史地理手法を進化論、退化論どちらかに結びつける必要はないと主張している [Willson 1976]。

結果的に、ダンデスによる退化論の問題は必ずしも主要な議論を形成することはなかったのであるが、ダンデスのアプローチは、学問史の考察として示唆的である。ダンデスの問いは、民俗

学者の「世界観」がどのように形成されてきたのか、内省的考察を求める。それは退化論という論点を、単にアメリカの民俗学の内部に止めず、時間的、空間的に拡大した脱領域的地平にとらえようとするもので、ポストモダン、ポストコロニアルにおける民俗学の方向性を提示する。こうした観点の例には、ダンデスも本論文中で注記しているように [Dundes 1969: 15]、アーサー・O・ラヴジョイ、等、アメリカ観念史学派によって体系化された歴史学の一領域「思想の歴史 (History of Ideas)」がある。それは人文、社会科学の分野を越えて探る観念史的アプローチである。観念史分析は概念／理論の起源と連続性を、様々な領域に横断的に探り、線的に再構成していくことを目的とする。例えばダンデスの追究は、民俗学、人類学の枠を越え、シュタイナーの人智学、ユングの心理学といったより広範な知的枠組みにおけるフォークロア概念を検証し、さらにロマンティズムや始源文化嗜好 (primitivism) への志向など、ヨーロッパ思想、哲学の世界観の影響にも言及している。

ただ、そのアプローチは、退化論の軌跡を明らかにすることが主眼であり、過去の様々な分野の研究から退化論的要素のみ抽出する、脱コンテクスト化した分析である。歴史の社会的脈絡への視点の欠如は、当時の構造主義的趨勢、特にダンデスがアメリカ民俗学における主要な先駆者だったことにも関わるであろう。しかし、その洞察は、後述するような、批判的歴史研究法の展開の中で生かし得るものである。少なくとも、ダンデスの分析は、学問、思想、心理、宗教等、あらゆる分野におけるフォークロアについての言説に、フォークロアという語に対する残存、誤謬、衰退といった意味が継承されていることに注意を喚起する。つまり「フォークロア」の語や領域が孕む問題は、民俗学内部の取り組みで解消できるものではなく、学問領域の境界を越えた議論が不可欠となるのである。

ダンデスの主張は、退化論的思考からの脱却、民俗学者の前提や認識の転換を訴え、現代の学問としての民俗学の再構築を目指す。ダンデスが、この論文より先の 1965 年、フォークを「少なくとも共通の一要素を共有する人々の集団」と定義づけたことも [Dundes 1965: 2]、フォークを退化論的な時間や階級の束縛から解き、現代に位置づけようとする試みである。ダンデスがこの退化論の論考の中で、特に前世代までのアメリカの伝播論的研究に批判的であるように、その発言は、起源／伝播から構造へのシフトを主導するものである。それは、一世代前までの権威が築いてきたフォークロア概念／理論基盤の転換を推進する一つのプロセスであり、当時ではラディカルな挑戦であったが、実際アメリカ民俗学に大きなインパクトを与えている。当然、ダンデスが単独で成し得ることではなく、それは 1960 年代からアメリカの民俗学において台頭しつつあったポストモダンの動きの中にある。

1960 年代以降、民俗学には、「フォーク」、「フォークロア」の概念の他、「ジャンル」、「テキスト」、「コンテクスト」といった、それまで自明視してきた規範的概念についてロジャー・D・エイブラハムズ、ダン・ベナモス、リチャード・バウマンといった、当時の若い世代の研究者を中心に再考する動きが高まっていた。そして、これら試みは 1972 年の『フォークロアへの新しい視点に向けて』に集約されるパフォーマンス・アプローチの興隆へと展開し [Paredes and Bauman 1972]、また 1980 年代のホブズボームら歴史学からの「伝統」概念をめぐる文化の政治性の研究へと発展していく。ダンデスの退化論の問いに対し、歴史地理手法が複数の理論的基準を含むというオーリングの指摘、また進化論、退化論、両方の理解が可能であることを示したウィルソンの視点は、1980 年代以降の人類学等、より大きな範囲で始まっていた新たな動きを予見する

ともいえる。それは、科学的中立的分析に基づく理論の構築に、実は多様な解釈の可能性があり、研究者の解釈やとりまく状況が関わるといった問題を含み、いわゆる表象の危機として前景化され、フォークロアの政治性を問題化する視点に繋がっていく。

しかしこうしたポストモダンの傾向の中で、なぜアメリカの民俗学は過去の「残存」の研究から脱却することができないのか。「フォークロア」の否定的意味の問題は未解決のまま燻り、研究者の苦悩は尚解消されていない。民俗学者の対象やアプローチがいくら現代社会に組み込み、今日的テーマを論じようとも社会のフォークロア観は、相変わらず過去に繋ぎとめられている。大学学部及び領域の再編、解体への動きが加速化する中、民俗学をとりまく状況は、むしろ悪化し学問領域としての危機が迫っている。「フォークロア」の名称の問題は、民俗学が、人文社会科学分野の中でも、苦境に追い込まれている要因の一つになっている。アメリカの民俗学者は、「フォークロア」に沈殿したままの「残存」に引き戻されざるをえないのである。残存、衰退、誤謬といった「フォークロア」のイメージは、研究者の社会的イメージを低下し、職業選択にもマイナスになっている。

この閉塞感の中で、1996年アメリカフォークロア学会大会の会長講演では、当時の会長ジェーン・C・ベックが領域名としての「フォークロア」を変更、再定義する可能性について検討を提案している [Beck 1997]。1998年のカーシェンブラット・ギンブレットの「フォークロアの危機」は、ベックのこの問いかけに対するものであり、批判的歴史研究 (critical histories / historiographies) への方向性を示している [Kirshenblatt-Gimblett 1998: 284] ⁽⁴⁾。「フォークロア」が過去に呪縛され続ける限り、これを概念化した民俗学に問題があって、あらためて領域の過去に立ち戻って検討する必要がある。ただ、民俗学の歴史といっても、問題は歴史にどのような視座で臨むかである。アメリカ民俗学者は、民俗学の歴史にどうアプローチし、領域の過去をどう記述してきたのか、また、民俗学は批判的歴史研究に何を追究すべきなのか。

歴史への挑戦

アメリカ民俗学の学問史の本格的な研究は、1968年、アメリカフォークロア学会の歴史研究委員会の設置に始まり、以降、1988年の学会設立百周年に向け、学問の歴史への関心が急速に高まっていた [Reuss 1973; Ben-Amos 1972; Bronner 1986; Clements 1988; Zumwalt 1988]。前述のように、ポストモダンの台頭の中、ジャンル概念等、前世代までの理論基盤への批判的研究が進展したのに対し、学問史研究は、むしろそれまで未開拓のままだった先学の功績とその意義について、あらためて見直し、評価する傾向にあった [Bendix 1997: 128-129]。この動きの中で注目が高まった人物に、アメリカ民俗学の設立を主導したウィリアム・W・ニューウェルがいる。アメリカ民俗学の学問史の主役、始祖として、ニューウェルの存在の重要性が再認識されてきたといえる [Bell 1973; 1979; Abrahams 1988; Ben-Amos 1984: 102-104]。学問史研究が厚みを増すに従って、アメリカ民俗学設立についての一つの歴史が成立し、アメリカ民俗学会の始まりは、特に初代会長フランシス・J・チャイルド、フランツ・ボアズ、ニューウェルを中心にして語られるようになっていく [Abrahams 1988; Bendix 1997]。

バラッド研究の権威であるチャイルドと、アメリカ文化人類学を主導するボアズの存在は、アメリカ民俗学が、文学と人類学の接点に形成されたことを示す。ニューウェルは人類学と文学を

媒介すると同時に、実質的に、学会の組織化、運営に中心的役割を果たし、両領域の概念、理論の枠組みを、アメリカ的コンテクストに再構築する役割を担った人物として評価される。彼自身はチャイルドの教えを受け、文学を専門としつつも、学会の設立や権威に科学性を不可欠とし、学会の人類学への志向を推進した。ニューウェルは、ドイツでジェイコブ・グリムが、イギリスでウィリアム・トムズがそれぞれ行ったように、「ジャーナル・オブ・アメリカンフォークロア」の創刊号に、フォークロアを以下のように分類したうえで、「アメリカで急速に消滅していくフォークロアの残存 (relics)」の収集を提唱する [Newell 1888: 3]。

- (a) イギリスフォークロアの遺物 (Relics of old English folklore)
- (b) 南部ニグロのロア (Lore of Negroes in the southern States of the Union)
- (c) 北アメリカのインディアン部族のロア (Lore of the Indian tribes of North America)
- (d) フランス領カナダ、メキシコ、他のロア (Lore of French Canada, Mexico, etc.)

ニューウェルのこの分類は、アメリカのフォークロアの概念化において、決定的な影響を及ぼし、アメリカ民俗学の出発点として繰り返し引用され、正典化されている。特に、ニューウェルがドイツの前近代的農民モデルのような単一民族的フォーク概念の代わりに、フォークロアを複眼的にとらえたことは、アメリカ民俗学が誇る文化多元性へのヴィジョンを先見的に示すものとして評価されるのである [Jabbour 1989: 292; Zumwalt 1988: 20; Abrahams 1988]。

さらに、ニューウェルが当時ヨーロッパで興隆した伝播論を提唱し、フォークロアを「世代から世代へと、記述されずに継承されてきた口承伝統と信心」と描写したことは、アメリカのフォークロアを「伝統」概念によって特徴づける主要な布石としても位置づけられる [Oring 1986: 8-9]。ニューウェルは、起源よりも、口伝えによるプロセスに重点を置いてフォークロアを概念化しアメリカのフォークロアに道を開いたことになる。このように、アメリカ民俗学の学問史研究は、ニューウェル、ボアズ、チャイルドを中心に、学会及び領域の形成に様々な側面で貢献し、影響を与えてきた学者や知識人の業績を明らかにし、民俗学が正統的近代科学領域として一貫した発展を遂げてきたことを証明してきたのである [Bendix 1997: 128-129]。

こうした歴史研究法の動向に対し、1980年代、特にエリック・ホブズボームの『伝統の創造』を契機に高まった伝統概念の再考を経て、1990年代には民俗学の歴史について批判的研究が始まる。それはアメリカ民俗学の脱構築的な歴史的研究法の中に、今後の方向性を見出そうとする試みである [Shuman and Briggs 1993; Feintuch 1995]。その動きは、特に考古学的アプローチによって、カーシェンブラット・ギンブレットやベンディックスが示すように、より先鋭に批判的歴史研究を開拓している。前述のダンデスが試みた観念史的分析に限界があるとするれば、考古学的分析は民俗学の過去に全く異なる視点から切り込み、新たな地平を切り開こうとする。つまり観念史研究を含め、伝統的歴史研究が、統一性を想定し、思考の連続的發展過程を描くのに対し、考古学的分析は何が見逃され、隠蔽されてきたかを問う [フーコー 2006 (1969)]。

概念や理論は歴史、社会の脈絡から孤立的に成立するのではなく、個々の時代を支配する知の枠組みにあって、その基本的条件を満たすことによって承認され、可能になるのである。今日の民俗学者が認識すべきは、民俗学が「近代」の枠組みにおいて規定されたことである。民俗学は「フォークロア」という言葉に過去を概念化し、近代以前の時代との「断絶/差異」を創出することによって近代科学領域として成立し得た。しかし差異においてフォークロアを構築し、よって近代性への視点を獲得した民俗学/民俗学者自体は、不問に付されたままである。「フォーク

ロア」は「近代」との関係性において存在するのであり、近代をこそ問題化し、近代の枠組みを明らかにする中でフォークロアを論じていく必要がある。問うべきは、フォークロアに近代の差異がどのように創出され、それがなぜ不可視化されてきたかである。さらに「フォークロア」をめぐる民俗学的言説が、その時代の秩序や権力、即ち国民国家、ナショナリズム、植民地主義といった「近代」の現象や運動にどのように関わってきたかである。

前述のカーシェンブラット・ギンブレットの「フォークロアの危機」は民俗学の形成過程を、19世紀後半以降の文献学、地理学、統計学の盛衰、国家、ナショナリズム、イデオロギーといった知や政治の歴史に、領域の過去を掘り下げ、歴史への系譜学的批判を導入している。この論述の中で、カーシェンブラット・ギンブレットは、民俗学が、ヨーロッパで形成された当時の二つの主な動向—イギリスの「残存」、ドイツの「純粋国民文化」—のどちらにおいても、「フォークロア」を時代や周辺環境から取り残され、外れたものとして概念化してきたことを示す [Kirshenblatt-Gimblett 1998: 297]。どちらのとらえ方においても、「フォークロア」は文化が発展する中で、本来消失する運命にあった、しかし文化の前段階から近代文明の中に偶然残されたものである。結局どちらも同様に、文化進化論のパラダイム—人間の未開、野蛮、文明への単一プロセスの進化という図式—の内部にあり、言語を共有しているのである。要はフォークロアに正負どちらの価値付けをするか、どう解釈したいかである。

どの観点からその歴史の発展との関係を解釈するかによって、進化論、退化論どちらの説明も可能である。例えば岩竹美加子は、進化論と批判されるイギリスのジョージ・L・ゴムの方法が、退化論であることを指摘する [岩竹 1999: 33]。また、前述のフィンランド手法に関して、ウィルソンはカール・クローンの進化論から退化論への変化を示しながら、その理論的シフトに政治的意図があることを示唆している [Willson 1976: 247]。或いは、ベンディックスは、ナウマンは沈下文化財説によって退化論の主唱者としてクローズアップされるが、ナウマンの言説に、下層のフォークの個性や創造性の欠如に対する否定的見方があり、そのフォークの「未開性」との対比によって、上層社会の進歩性や優越を論ずる進化論的意図を明らかにしている。ナウマンが進化論的言葉を使っているにもかかわらず、上層階級の文化財の「退化」を強調した [Bendix 1997: 113-115] ことが前景化しているにすぎない。

したがってニューウェルの「フォークロア」概念を、あらためて19世紀末近代アメリカにおける知の枠組みの中に捉え直してみたい。重要な論点の一つは、ニューウェルがフォークロアの定義に設定した人種／文化区分であり、その意味を当時のアメリカの歴史と社会の脈絡に探っていく。19世紀末、建国100年を経たアメリカは近代化と資本主義の発展によって、ヨーロッパ列強に並び国際社会での覇権を強めていた。その反面、社会の急速な産業化、移民の増大、都市問題、等、近代がもたらす疎外感や不安を抱え、アメリカにおけるフォークロアへの関心はその一つの反近代的反応として表出する。過去へのロマンティックな視線という点で、ドイツ的フォークロアの思想を受け継ぐ、即ち過去の遺産として正の価値を付与される。しかしその肯定的価値の意味付けがあるがゆえに、ニューウェルが概念化する「フォークロア」の根底に、文化進化と残存の思考があることが見落とされてしまうのである。

ニューウェルは頑強な反進化論者のボアズの影響もあって、表向きには進化論に否定的であるが、彼の伝播論は「高層文化から下層文化」への伝播を基本とする退化論であり、そこには未開から文明までの文化進化による差異が前提される。ニューウェルがアメリカに「フォークロア」

を定義に示した人種／文化の分類は、こうした理論を支えるべく設定され、また4つの区分には、異なる基軸が用いられている。ニューウェルの分類の第一項目である「イギリスのフォークロアの遺物」は、「過去」に属しながら近代社会アメリカに残存したもので、すでに機能していない。確かにここにはフォークロアと「近代」との間に、時間の断絶が生じることになる。

これに対し、「南部ニグロのロア」、「北アメリカのインディアン部族のロア」はまだ生きており、同時代に存在する—これら区分に「フォークロア」の語が用いられていないのは、ニューウェルにとって、「フォークロア」は過去のもので、ここに適用され得ない言葉である。生きたロアを尚「フォークロア」の定義に組み入れるため、ニューウェルは時間的断絶を人種の基軸に読み込むことによって、差異を創出したのである⁵⁾。したがって、イギリスの項目と、ニグロ及びインディアン項目は、異なる性質のものである。さらに、前者と後者の間には、文化の発展段階の差異が創られ、フォークロアの退化論を可能にする。ニューウェルにとって、伝播はあくまでも前者から後者、文明（civilized）から非文明（uncivilized）への方向に向かい、その逆流は起こらないことを、白人と黒人の例によって強調している [Newell 1895: 16; 1906: 4]。同じ発想がトンプソンの思考にあることを、ダンデスは前述の退化論論文で示す。ダンデスによればトンプソンはアメリカの先住民の民話研究に退化論を適用し、先住民の民話にヨーロッパ起源の話型からの借用があっても、その逆はないと論ずる [Dundes 1969: 6]。

前述のように、変化を「退化」或いは「進化」ととらえるかの解釈は研究者の立つ位置に関わり、人種、ジェンダー、階級等、歴史や社会の複雑な関係性に構築される。ニューウェルのこの退化論には彼自身のアングロサクソン系白人の視点が見える。ニューウェルやトンプソンの言説が上層から下層のみの伝播を主張することは白人の絶対的な同化力を示唆し、その言説がイギリス系白人を中心とした「権力」となり、社会階層を創っているのである。確かに、当時のアメリカでは移民の波が頂点に達し、人種的、民族的多様性は、無視できない現実となっていた。ニューウェルがイギリスのフォークロアの項目に最も多くの説明を加え、関心を置くように、非イギリス系移民の急増を前に、アングロサクソン系主流文化に危機感があった。「アメリカ人」の境界が拡大的に変化していた当時、ニューウェルが人種区分を設けたことは、こうした歴史、社会の状況にとらえて考察する必要もある。また「フランス領カナダ／メキシコ他のロア」は、その極めて少ない説明からすれば、補足的な項目といえるが、カナダとメキシコは、アメリカの地理的境界として政治的に重要である。拡張主義政策の下、当時のアメリカの領土は最大に達しており、両地域は拡大する空間的周縁に位置づけられる。

したがってアメリカの「フォークロア」の定義においては、まず「アメリカ人」を明確にすべく、領土内の野蛮、未開、周縁の存在をどう理論化するかが問題であり、彼らを文化進化の枠組みにしたがって包摂したのである。こうした時間、人種、空間といった複数の次元に差異を創る「権力」が問題化されなければならない。しかし、その差異と権力の問題から、アメリカ民俗学は、文化的多元論或いは多文化主義といった言葉によって、目をそらしてきたのではないか。近代は、人種のみならず、さらに、民族、ジェンダー、セクシュアリティ、階級といった様々な断絶を創出したのであり、現代社会はこうした基軸による複層的な差異を内包する。これら差異を問題化し、突き詰めていくことは、多大な苦痛や危険を伴うことである。アメリカ民俗学者は、1960年代以降、アメリカ社会の文化多元論、エスニック・リバイバルの高まりの中で、周縁化されてきたマイノリティのフォークロアの表象を媒介することによって、多様性をテーマ化してきた。しか

し必ずしも徹底した差異への批判的追求とはなっていないであろう。もちろん文化多元論、多文化主義は、普遍性、平等性の名の下、差異を無視する西欧中心主義に対抗する議論として重要であり、またその社会实践には積極的に関わっていく必要がある〔古谷 1998: 94〕。ただ、マイノリティのフォークロアを無批判に称揚、擁護することは、問うべき問題を不可視化することになるのではないか。

アメリカ民俗学の批判的歴史の挑戦は、「残存」をめぐる民俗学の言説に潜む権力を明らかにすることである。フォークロアに構造化された人種、民族、階級等の差異は、近代／現代の問題である。これを明らかにし、論じていくことによって、民俗学は初めて現代の学問と成り得るのではないだろうか。また、それは決して民俗学だけの問題ではなく、人類学、社会学、心理学等、周辺領域と共有すべき近代／現代の問題であり、世界各地の民俗学者が互いに共有すべきグローバルな問題である。民俗学の危機に、変化や冒険を恐れ閉鎖するのではなく、様々な議論の場に参加し、民俗学的知見を貢献することに、民俗学の意義は求められるのではないだろうか。

註

- (1) 原題 *The Devolutionary Premise in Folklore Theory*. 同論文は飯島吉晴によって 1979 年に和訳されている。「〈資料〉民俗学理論における退化論的前提」『人類文化』1 参照。
- (2) ミューラーについては日本では、村松一男、大林太良、他による神話学研究が詳しく論ずる〔村松 1999: 58-75〕。
- (3) 例えば沈降文化説についてはアメリカ民俗学の入門書の中で、ジャン・H・ブランヴァンド〔Brunvand 1998: 50, 396〕、ダン・ヨーダー〔Yoder 1972: 299〕の説明がある。また言語疾病説については特にリチャード・ドーソンがイギリス民俗学の論考の中で論じている〔Dorson 1965: 57-83; 1968: 160-186〕。
- (4) ベックの提案に対しては賛否両論があり、カーシェンブラット・ギンブレット、レギーナ・ベンディックスは肯定的、ダン・ベン・アモス、オーリングは否定的にそれぞれ見解を提出している〔Bendix 1998; Ben-Amos 1998〕。
- (5) カーシェンブラット・ギンブレットは、ニューウェルの関心は口述性にあって、識字性と文盲性の差異への転換を強調している。

文献

- Abrahams, Roger D. 1988. *Rough Sincerities: William Wells Newell and the Discovery of Folklore in Late-19th Century America*. In *Folk Roots, New Roots: Folklore in American Life*, eds. Jane Becker and Barbara Franco, pp.61-75. Lexington, MA: Museum of Our National Heritage.
- Bascom, William. 1955. Verbal Art. *Journal of American Folklore* 68(269):245-252.
- Beck, Jane C. 1997. Taking Stock: 1996 American Folklore Society Presidential Address. *Journal of American Folklore* 110(436): 123-139.
- Bell, Michael J. 1973. William Wells Newell and the Foundation of American Folklore Scholarship. *Journal of the Folklore Institute* (Special Issue: American Folklore Historiography) 10(1/2): 7-21.
- . 1979. The Relation of Mentality to Race: William Wells Newell and the Celtic Hypothesis. *Journal of American Folklore* 92(363): 25-43.

- Ben-Amos, Dan. 1972. Toward a Definition of Folklore in Context. In *Toward New Perspectives in Folklore*, edited by Richard Bauman and Américo Paredes, 3-19. Bloomington: Trickster.
- . 1973. A History of Folklore Studies—Why Do We Need It? *Journal of the Folklore Institute* (Special Issue: American Folklore Historiography) 10(1/2): 113-124.
- . 1984. The Seven Strands of Tradition: Varieties in Its Meaning in American Folklore Studies. *Journal of Folklore Research* 21(2/3): 97-131.
- . 1998. The Name is the Thing. *Journal of American Folklore* 111(441): 257-280.
- Bendix, Regina. 1997. In *Search of Authenticity: The Formation of Folklore Studies*. Madison, WI: The University of Wisconsin Press.
- . 1998. Of Names, Professional Identities, and Disciplinary Futures. *Journal of American Folklore* 111(441): 235-246.
- Bronner, Simon J. 1986. *American Folklore Studies: An Intellectual History*. Lawrence, KS: University Press of Kansas.
- Brunvand, Jan H. 1998. *The Study of American Folklore: An Introduction*. New York: W.W.Norton.
- Clements, William W., ed. 1988. *100 Years of American Folklore Studies: A Conceptual History*. Washington D.C.: The American Folklore Society.
- Dorson, Richard. 1965. The Eclipse of Solar Mythology. In *The Study of American Folklore*, ed. Alan Dundes, pp57-83. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- . 1968. *The British Folklorists: A History*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Dudnes, Alan, ed. 1965. *The Study of Folklore*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- . 1969. The Devolutionary Premise in Folklore Theory. *Journal of the Folklore Institute* 6(1): 5-19.
- Feintuch, Burt, ed. 1995. Common Ground: Keywords for the Study of Expressive Culture. *Journal of American Folklore* 108: 391-528.
- Jabbour, Alan. 1989. On the Values of American Folklorists. *Journal of American Folklore* 102(405): 292-298.
- Kirshenblatt-Gimblett, Barbara. 1998. Folklore's Crisis. *Journal of American Folklore* 111:281-327.
- Newell, William W. 1888. On the Field and Work of a Journal of American Folk-Lore. *Journal of American Folklore* 1:1-7.
- . 1895. Theories of Diffusion of Folk-Tales. *Journal of American Folklore* 8(28): 7-18.
- . 1906. Individual and Collective Characteristics in Folk-Lore. *Journal of American Folklore* 19(72): 1-15.
- Oring, Elliot. 1975. The Devolutionary Premise: A Definitional Delusion? *Western Folklore* 34(1): 36-44.
- . 1986. On the Concepts of Folklore. In *Folk Groups and Folklore Genres: An Introduction*, ed. Elliot Oring, pp.1-22. Logan: Utah State University Press.
- Paredes, Américo, and Richard Bauman. 1972. *Toward New Perspectives in Folklore*. Bloomington, IN: Trickster Press.
- Reuss, Richard A. 1973. Introduction. *Journal of the Folklore Institute* (Special Issue: American Folklore Historiography) 10(1/2): 3-5
- Shuman, Amy, and Charles L. Briggs. 1993. Theorizing Folklore: Toward New Perspectives on the Politics of Culture. *Western Folklore* 52: 109-134.

- Wilson, William A. 1976. The Evolutionary Premise in Folklore Theory and the "Finnish Method." *Western Folklore* 35(4): 241-249.
- Yoder, Don. 1972. Folk Costume. In *Folklore and Folklife: An Introduction*, ed. Richard M. Dorson, pp.295-323. Chicago: University of Chicago Press.
- Zumwalt, Rosmary L. 1988. *American Folklore Scholarship: A Dialogue of Dissent*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- 岩竹美加子 1996『民俗学の政治性—アメリカ民俗学 100年目の省察から』未来社
——— 1999「重出立証法」・「方言圏論」再考(三)『未来』393: pp.30-35
- エイブラハムズ, ロジャー D. 1996「ウィリアム・ウェルズ・ニューエルと19世紀後期—アメリカにおける民俗の発見」、岩竹美加子編訳『民俗学の政治性—アメリカ民俗学 100年目の省察から』pp.62-85、未来社
- 酒井直樹 1996「序論—ナショナリティと母(国)語の政治—」酒井直樹、ブレット・ド・バリー、伊豫谷登土翁編『ナショナリティの脱構築』pp.9-53、柏書房
- フーコー, ミシェル 2006(1969)『知の考古学』(中村雄二郎訳)河出書房
- 古谷嘉章 1998「異種混淆の近代と人類学」『現代思想〈文化節合のポリティクス—文化人類学の新しい段階〉』6(26-7): pp.92-105
- 松尾幸子 1976「ドイツ」和歌森太郎編『日本民俗学講座 5 民俗学の方法』朝倉書店
- 村松一男 1999『神話学講義』角川書店